

## 一般演題 1 O1-04

### ハブ咬傷における高気圧酸素治療の役割

○清水徹郎

南部徳洲会病院 救急診療部

#### 【目的】

沖縄県におけるハブ咬傷の治療実態に関する報告は少ない。ハブ咬傷の治療の要点は溶血毒による組織の高度腫脹対策にある。抗毒素投与は唯一の確立された治療として推奨されている一方で、ウマ血清由来であることから、副反応が問題となる。腫脹部に対する切開は、ガイドライン上は推奨されないが、当院ではこれを行う事が比較的多い。高気圧酸素治療は腫脹の軽減効果が期待できるため、これをハブ咬傷に応用することは理にかなっている。当院での実態を調査検討し、ハブ咬傷における高気圧酸素治療の役割を検討した。

#### 【対象】

2015年1月1日から2024年12月31日までの10年間に当院で経験したハブ咬傷98症例について後方視的に調査を行った。

#### 【結果】

年次別発生数は漸減傾向であった。男性が7割強を占めた。年齢別では60～70代が最も多かった。受傷した場所は屋外が約9割で、中でも農作業中の受傷が多かった。受傷部位は上肢遠位、下肢遠位に多かった。入院を要した症例は約8割であった。全症例中6割は何らかの切開を受け、抗菌薬はほぼ全例に投与された。破傷風トキソイドの施行は76.5%であった。抗毒素を使用した割合は16%であり、1例に血清病を生じた。アナフィラキシー症例はなかった。高気圧酸素治療は約半数に施行された。死亡例はなく、機能障害をきたした症例もなかった。

#### 【考察】

溶血毒による凝固異常からの出血と、二次感染のリスクから、腫脹部に対する切開はガイドライン上推奨されていない。これは東南アジアのより毒性の強い蛇毒では高度の凝固異常をきたすことを念頭においたものと考ええる。ハブ咬傷においては適切な症例選択を行った上での洗浄、ドレナージを目的とした腫脹部の切開は有効な治療手段である可能性があり、これに高気圧酸素治療を付加することでさらなる治療効果が期待できる。軽症例では高気圧酸素治療単独での経過観察も可能である。抗毒素は先行研究より使用頻度が少なく、副反応出現率も低かった。切開と高気圧酸素治療の併用が抗毒素使用の減少につながった可能性はある。重症例に対して、切開、抗毒素投与、高気圧酸素治療の併用は効果的であると考ええる。

#### 【結語】

当院の治療方針は腫脹が高度な症例に対し、早期に切開をすることが比較的多いことと、高気圧酸素治療の併用が特徴である。毒蛇咬傷の国際的ガイドラインとは乖離するが、治療成績と地域性を考慮すると妥当なものと考えられた。比較対照がないので、客観性に欠けるのは残念だが、これまでの難治性外傷に対するエビデンスを考慮すると、ハブ咬傷に対する高気圧酸素治療は有用である可能性が高いと考える。